

## 意思の表出をめざして

- ・視線入力装置を使用して、将来に視線による意思疎通ができるように注視で風船割ゲームをしています。
- ・児童は目以外の部分を動かすことは障害上難しく、声や表情ですらだすことはできません。
- ・風船割ゲームでどのような範囲が見えて、練習の結果どのように変容しているのかがわかりやすいのがこのソフトの特徴です。

<※小2・自立活動>

### ICT活用のポイント

注視した時間の長さによって色で表示され、自動でそのログが保存される。それにより評価の根拠としてしよることができる。



 授業中の様子  
(動画：約30秒)

## 発語による意思表示を代替

- ・文字と物を一致させることも目的として行っています。触ることで音声もできるので音と文字の一致を促すこともできる。
- ・文字の背景の色を変えて摂食指導において、飲み込みに注意するもの（オレンジ色）やアレルギー（赤）があるものをクラスの児童と教師で確認することができる。

### ICT活用のポイント

ドロップトークアプリを使用して、本日の給食をクラスの友達に知らせる係をしている。発語ができないけれども手を少し動かすことができると扱いやすい。



 ドロップトーク画面動画  
(約14秒)

## 学習への意欲を高め、理解を深める

国語の漢字や算数の計算問題といった学習で、間違えてしまった答えを消すことに抵抗がある児童に、タブレットの学習ソフトを用いて、学習を行いました。内容に関しては、足し算や引き算、実際に自分で文字を書くといった内容のものでしたが、プリント学習と違い間違った問題でも、「全部〇がいい！」と全問正解するまで前向きに取り組むことができました。

<第4学年児童：内容1年算数等>

### ICT活用のポイント

タブレットを使うことを伝えるだけでも意欲UPです。学習に取り組みさせたかったので、そのソフトを起動する方法や操作方法を教える時間を前もってとるといいと思います。



 Eライブラリ 計算ドリル  
(動画：約12秒)

## カメラ機能を利用して話す力を高める

まずタブレットについているカメラ機能を使い、学校の中の自分の好きな場所を撮影する学習を行いました。あまり進んで自分の考えを声に出して話すことが苦手な児童でも、カメラ機能をととても楽しそうに利用していました。

そのあとは、その場所を撮影した場所や理由について質問しました。撮影した画像を見せながら、自分の言葉で説明することができました。

<第1学年 話す学習>

### ICT活用のポイント

タブレット利用に際し、抵抗感をなくす学習としてもカメラは有効に感じました。ただし持ち歩くことになるため、こけたり落としたりすることが無いよう、安全に配慮する必要もあると感じました。



 タブレット カメラ機能  
(動画：約9秒)

## 1人1台端末への抵抗感をなくし扱い方を知る

1人1台端末の導入にあたり、まずは操作方法やログインなど基本的な設定を行う必要がありました。交流学級では、集団の中で指示を聞き取り操作する必要があったため、特別支援学級に所属している児童のみでタブレットの扱い方を指導しました。

具体的な指導に関しては、大画面で操作画面を表示し、実際に目の前で操作しました。

### ICT活用のポイント

タブレットを操作したことが無い児童がほとんどだったが、自分が触る画面と同じものが見えると、「わからない」ではなく、やってみようとする姿勢がすごく感じられました。



授業の様子  
(動画：約30秒)

総人数＜6年6名 5年3名 4年4名 2年3名 1年3名＞

### 各教科等の指導におけるICT活用の基本的な考え方

新学習指導要領に基づき、**資質・能力の三つの柱をバランスよく育成**するため、子供や学校等の実態に応じ、各教科等の特質や学習過程を踏まえて、教材・教具や学習ツールの一つとしてICTを積極的に活用し、**主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげる**ことが重要。

#### 【留意点】

- **資質・能力の育成により効果的な場合に、ICTを活用する。**
- **限られた学習時間を効率的に運用する観点からも、ICTを活用する。**

○本校の特別支援学級(自情2クラス知的1クラス)に所属している児童全員で取り組みました。高学年も多いため、实际操作が完了した児童が、表示されている画面を見ながら、自分から下級生に声をかけその時間に行う予定のものをすべてを行うことができました。

○ただし、すべてを児童任せにするのはやはり難しく、操作が複雑なところは教師が手を出し支援をする必要があるため、人数が多い場合は、それなりの準備が必要になります。

## 他校とのオンライン交流 4つの教育効果

### 1 感動

自分とは違う学校の特支の子供達と出会い感動の表情をしていました。当時、豊岡市は雪が積もっていたため、環境の違いにも驚いている様子でした。

### 2 親近感

ホワイトボードを使って当日の給食を紹介しあうなど共通の話題で交流することによって親近感が沸き、相手を親しく感じたようすでした。

### 3 広がり

特別支援学級の児童は、コミュニケーションが苦手な児童が多く交流範囲が狭くなりがちです。コロナで外出して交流することも難しい状況の中、オンラインを活用することによって児童の交流範囲を広げることができました。

### <自立活動>

### ICT活用のポイント

オンラインを活用することによって、西宮市と豊岡市のような遠隔地の児童同士が交流することができます。また、直接会うと緊張して打ち解けるまでに時間がかかりますが、画面越しの交流なので緊張する要素が軽減し最初から活発に会話を交わすことができました。



▲相手校と合わせて本校側も映すことによって、相手校の様子と同時にこちらがどのように見えているか認識しながら話ができる。

### <ICT機器の設置例>



### <交流のようす>



▲自分の図工の作品を発表



▲座った状態で画像が見えるように設定



▲ホワイトボードに文字を書いて交流



▲友達の発表に拍手

## Ozobotで児童の思考力を高める効果

オゾボット  
Ozobotは線の上を走るようにプログラミングされています。またペンやシールの色を認識するので、色で動きを命令することができます。シンプルかつ可視化できるこの特徴を生かし、道づくり迷路づくりなど児童がさまざまな思考を働かせて活動することができます。

<自立活動>

### ICT活用のポイント

Ozobotは世界最小のプログラミング教材と言われているだけあって、児童にとって扱いやすく親しみがもてる教材です。障害をもっている児童にとっても、わかりやすく取り組みやすい教材です。



▲上の写真のように5年生の児童同士がそれぞれ自分のOzobotで追いかけたり、ぶつかったり、よけたりという遊びを始めた。自然に主体的対話的な学習が生じる教材である。



3年生の児童が作成した迷路の動画（約15秒）

## Viscuitで児童の学習意欲を高める

ビスケット  
Viscuitはタブレットに描いた絵を動かしたり、その絵をつかってきれいな模様やゲームを作ったりすることができるプログラミング教材です。文字を使わず動きをつくることのできるため、障害をもっている児童も意欲的に楽しく取り組むことができます。

<自立活動>



2年生の児童がViscuitで自分が食べたいお弁当を作成している動画（約15秒）



3年生の児童の作品の動画（約10秒）

### ICT活用のポイント

タッチパネルの利点を生かし、指を使って感覚的に動く絵を作成することができる。

知的障害学級の児童3名がつくった作品を一つの画面に表示してみんなで指さして鑑賞し合っている動画（約10秒）

## 個別最適な環境で学習する

特別支援学級の児童の中には、さまざまな事情で交流学級に行くことができない児童がいます。このような児童に学校や交流学級の一員であることを自覚させ学習する機会を保障する必要があります。学校行事や交流学級の授業をオンラインで特別支援学級へ映像配信することによって、その児童にとって最適な環境での学びを提供することができます。

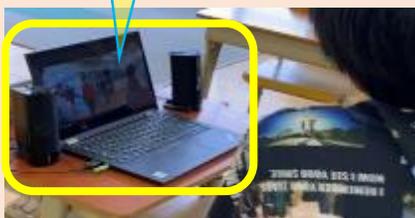
### <第5学年 学校行事 総合>

## ICT活用のポイント

大勢の児童と同じ場にいることが苦手な児童も映像なので、心理的な負担を感じることなく、その場にいる児童が見聞きしている内容を画面を通して体験することができます。



▲マイクスタンドにタブレットスタンドを取り付け、いつでもタブレットを付けて撮影が可能な状況にしている。この時は、6年生を送る会で花道を歩く6年生の姿を撮影。



▲5年生の児童は特別支援学級内の安心できる環境でじつと静かに画面に映る6年生が歩く姿を見守っていた。

## < 実践イメージ >



▲特別支援学級の児童の交流学年の集会をタブレット端末（本実践ではLenovo）で撮影し、オンライン会議アプリ（本実践ではTeams）でリアルタイムに中継する。

パソコン  
(Teamsの会議で集会に設置した  
タブレット端末と接続)

スピーカー



▲特別支援学級の児童は本人にとって落ち着く環境で集会を視聴することができた。

## アニメーションにより、視覚的に漢字の分け方が分かり、主体的に取り組める漢字教材 <通級>

通級による指導では、漢字が覚えられなくて、平仮名ばかりの作文になる、漢字テストで点数が取れない等の困難さがある児童がいます。

- 苦手さの背景 . . . 漢字の部首など特徴を捉えることが難しく、覚える手がかりがつかめない  
書字に負担が大きな児童は、複雑な漢字を書くことや何度も漢字を書くことが苦手
- これまでの指導 . . . 漢字を部首やパーツなどそれぞれが覚えやすく、唱えやすいように分けて覚える。  
(部首やパーツの分け方は「ミチムラ式漢字カード」を参考に児童と相談)  
漢字の間違えやすい箇所を色分け、拡大。  
ホワイトボードで書字と消す負担を減らして、繰り返し練習する。

### ● ICT機器を用いると

- ① 児童と一緒に相談して分けた部首やパーツ、間違えやすい箇所のみ色を変えるようにアニメーションをつけることで覚えるポイントが明確になる。そして、スライドの拡大で細部のチェックができ、繰り返し見ることができる。
- ② PowerPointのスライド上等にタッチペンで書きこむことで、書字と消す負担の軽減ができる。記録に残したい間違いは、スクリーンショット等で記録することができ、復習ができる。

## アニメーションにより、視覚的に漢字の分け方が分かり、主体的に取り組める漢字教材 <通級>

### PowerPointの漢字教材

<第3学年 漢字>

この書き順付き文字スライドは、近藤武夫・中村賢龍（東京大学先端科学技術研究センター）とマイクロソフト株式会社の共同研究により開発されたものを使用しました。入手先は「PowerPoint 活用サイト」を参照。

### ICT活用のポイント

児童と相談した覚えやすいパーツで色分けをした。目で見て分かるようにすることで、児童のモチベーションが上がりました。全ての漢字をアニメーションにするのは大変なので、「3学期で重要な30文字」や「まとめテストに向けて」など漢字を絞るといいと思います。

事前に児童と漢字の覚え方を相談し、スライドを見ている時も分け方を唱えながら見るようにしています。



しゅくだいのしゅく、やどにとまるのやど



漢字のスライド動画（約14秒）

### タッチペンでの漢字練習

<第3学年 漢字>

### ICT活用のポイント

タッチペンで紙に書くように丁寧に書くことは性能によっては難しく、動画のように線が定まりません。ある程度のバランスと漢字のパーツが合っていることを評価する方が良いでしょう。

漢字を覚えることが苦手な児童とは、始めからバランスや書き順は求めず、漢字のパーツが正解できたという達成感が得られるようにしています。何度も手軽にチャレンジできると、モチベーションが上がっていきます。

タブレット上に書くことは、手軽に覚えられているかチェックすることができます。ただ、ホワイトボードを併用し、書いたものを写真に撮って記録を残す方が慣れるまでは使い勝手が良いです。



タッチペンで書いている動画（約9秒）

## ICTを活用して、空間的制約を越えて共に学ぶ

落ち着いて学習できる環境は児童によってそれぞれです。集団での学習形態よりも、少人数での学習形態の方が、落ち着いて学習できる児童もいます。

落ち着いて学習できる形態を選択しながら、学級の友達とも共に学んでいる実感を得られるように、教室と別教室とをTeamsの会議で中継して学習を進めました。保健室登校や自宅療養中の児童にも対応できます。

<リモート学習>

### ICT活用のポイント

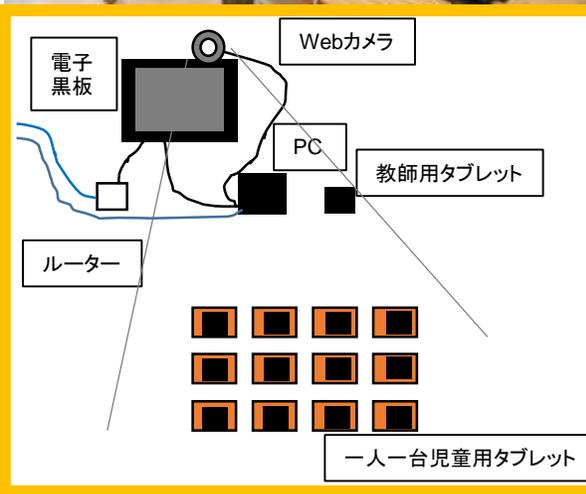
互いの教室の児童の学習の様子が伝わるように、後ろからではなく教室前面からのアングルで撮影しました。教師からの指示は、Power Point画面を共有して行いました。



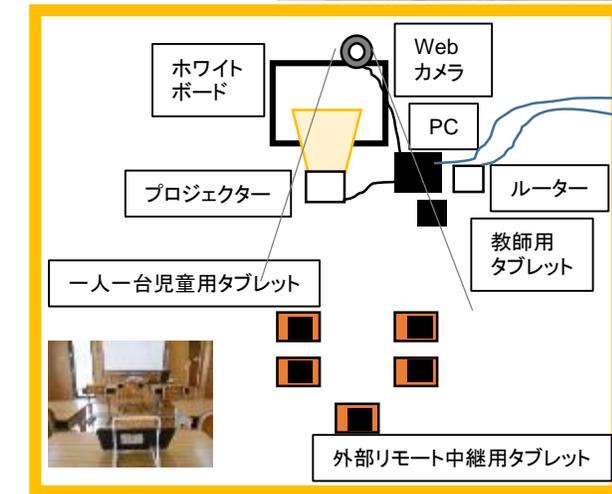
授業風景動画（約30秒）

### 機材のセッティング

#### 教室



#### 少人数学習教室



## タブレットで板書を書き写す支援をする

眼球の縦移動に困難を抱える児童にとって、黒板と手元のノートと視線を行き来させながら書き写すことは、苦労がある場合があります。板書計画を渡しておく支援も可能ですが、算数などでは、解法が分かってしまうなどの不都合があります。タブレットで中継することでその問題はクリアできます。児童は、視線移動が小さくなり、「楽になった」と話していました。

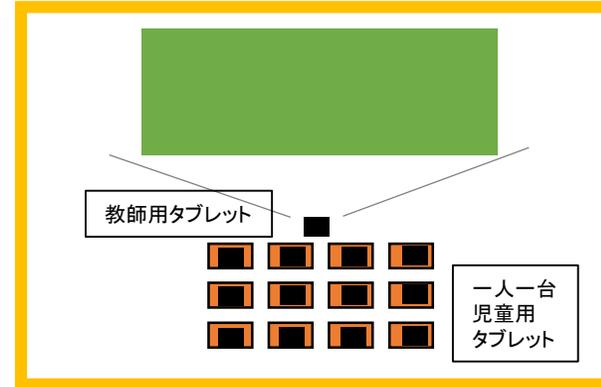
### ICT活用のポイント

Microsoft Teamsを利用しました。教師のタブレットで板書内容を撮影して中継し、支援を必要とする児童は自分のタブレットでその中継を視聴する形になります。レコーディング機能により、授業記録を残すこともできます。



Microsoft Teamsを利用した板書内容の生中継

### 機材のセッティング

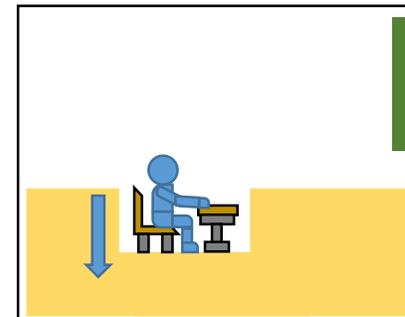


### できるだけシンプルな形で

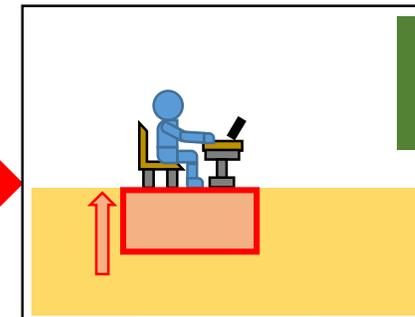
デスクトップPCやwebカメラを使ったセッティングから、できるだけシンプルなセッティングを目指してタブレットを活用する形になりました。

本校の環境であれば、学習活動ソフトウェア「スカイメニュー」を用いて、児童用タブレットに教師用タブレット画面を投影するのが一番シンプルでした。無理のない形を探ることが重要です。

### ICTを活用するねらい



学習内容以外の困り感がある状態



ICTを活用して支援をした状態

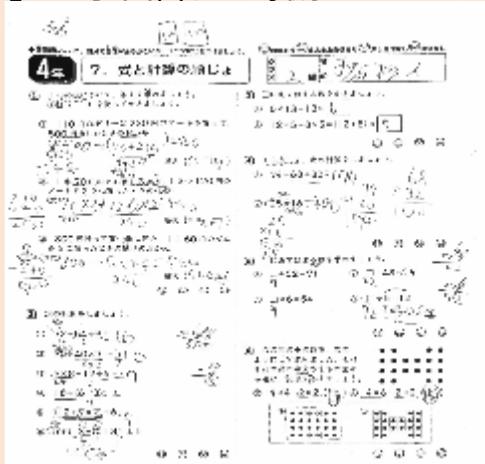


ビジョン  
トレーニング  
など

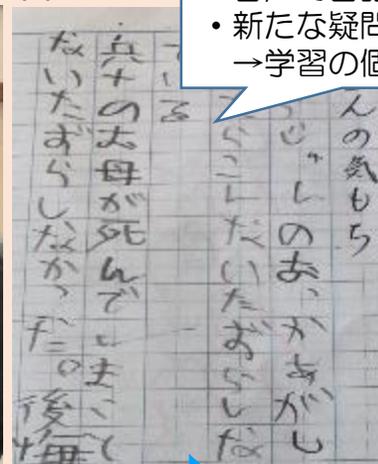
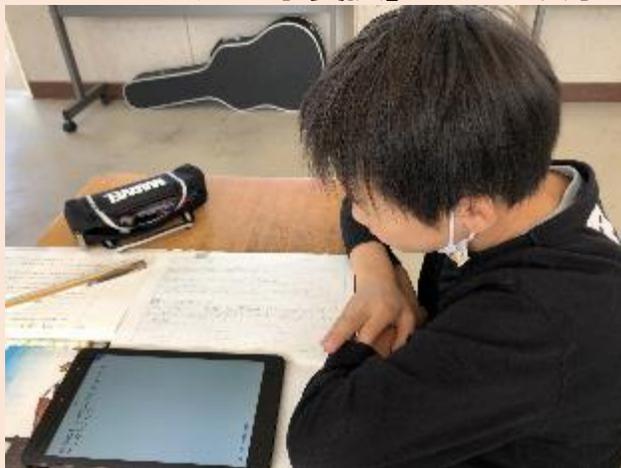
その授業のめあてにせまるのに、学習内容以外の困り感があって、そこに多くの神経を割かなければならない場合があります。ICTの活用によって授業のめあてに集中する支援ができます。支援する一方で、別の場面でトレーニングを積むことも重要です。

## 個別最適化学習 実践事例 ～読み・書きに困り感があるA児～

「Office Lens」で学習課題を撮影



「音声文字変換」すれば漢字を書ける！

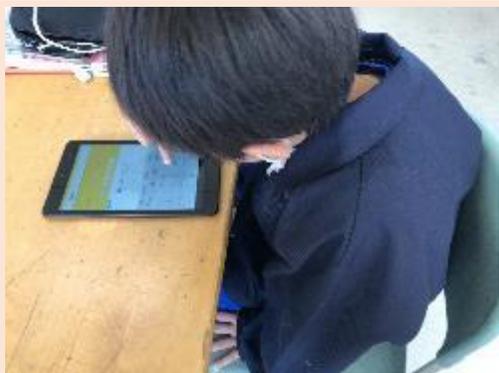


- 音声で言語化
- 新たな疑問を表出  
→学習の個性化へ

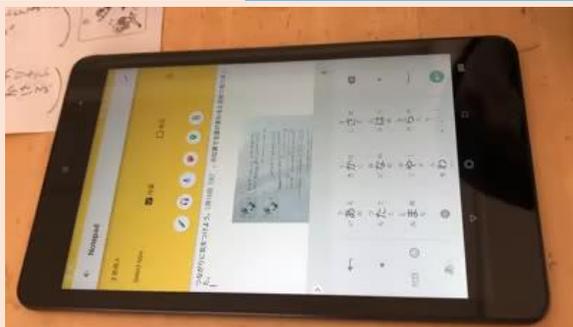
個別最適な  
学びの実現

スタディ・ログ

個別最適化学習の推進



「Notepad」で学習ログを保存



音声入力の様子（動画約12秒）

- 学習成果を可視化
- 写真でふり返り  
→指導の個別化へ

### ICT活用のポイント

読み・書きが苦手な児童でも、音声（聴覚）や写真（視覚）、文字入力などで自分の意見を表現できるようになった。ICT活用により、個々に合わせたスタイルでの学習が可能になったと言える。A児は自信をもって学習に取り組めるようになった。

## ICTを使って、一日を振り返る

その日あった出来事を振り返るのにgoogle Formを活用した。画像を用いて今の気分を選択できるようにすることで、言葉で今の気分を表すことが苦手な児童も振り返りができるようにした。また、タイピングができる児童には、その日どんなことがあったのか入力させ、教師がコメントを返すことで、会話のきっかけとなった。

<特別支援学級 知的>

### ICT活用の ポイント

ICTをつかうことで、興味を持って取り組むことができた。また、画面にタッチして選ぶだけなので、どの子でも振り返りを行うことができた。



振り返りを行っている様子

## Google Meetを使った交流会

コロナの影響で以前まで行っていた町内の特別支援学級の交流会や卒業生を祝う会が中止となってしまったため、Google Meetを使って交流会を行った。Google Meetを使うことで遠隔で教室をつないで交流を行うことができた。相手意識を持って自己紹介をしたり、相手の話を聞くことも指導として行った。児童の特性により、恥ずかしがったりする児童もいたが、教師がサポートしながら取り組むようにした。

### ICT活用のポイント

手軽にいろんな教室とつながることができるので、相手意識を持った活動ができる。いきなり他校とつなぐのではなく、担任や校長先生と遠隔でつないで練習を行うことで慣れさせる。



交流会の様子

児童の学習活動	指導上の留意点
1 ウォーミングアップをする ・発声練習 ・自己紹介練習	○大きな声ではっきりと話すことができるよう緊張を解くようにする
〇〇小学校と交流しよう	
2 自己紹介をする ・自分のことを相手に伝える  ・相手の自己紹介に興味を持って聞く	○画面を見ながら話すよう声かけを行う。聞き取りにくいところは教師が繰り返し言うようにする。 ○拍手をするなどリアクションをとれるよう見本を見せる。
3 教室紹介をする ・自分の教室にあるお気に入りのものを伝える  ・相手の教室紹介に興味を持って聞く	気になったことについて質問させるようにする。
4 ○×クイズをする	考える時間や答えの発表の時に間を取るようさせる。
5 授業のふり返しをする	

本時の流れ

## 学びの振り返り等の自己表現を支援する学習記録

<自閉・情緒学級 自立活動等>

学びの跡を文章で表現したり、それを想起したりすることが難しい場合があります。音声で授業の感想を入力するなどICTを活用することで、より自己の具体的な振り返りが可能となりました。

また、音声や写真などのデジタルでの記録は前時の学びを想起しやすくなり、自己の学習の成果を可視化することができるので学習意欲の高まりも見られました。

### ICT活用のポイント

自己の感想・振り返りだけでなく、書くことが苦手な児童に対しては板書を写真で記録することや動画を使った学びの跡の残し方などが考えられます。

さらに、記録したものを教科ごとや学習形態ごと(練習問題・テストなど)に分類する(OneNote等を活用)ことで、評価の資料にもなり指導の個別化を図ることができます。

### <児童の特性>

自分の言葉で表現はできるが、文章にして表すことが苦手である。

写真や音声での記録

より簡単に、そして具体的に自分の言葉で学びの跡を残すことができる。

### <ICT活用の効果>

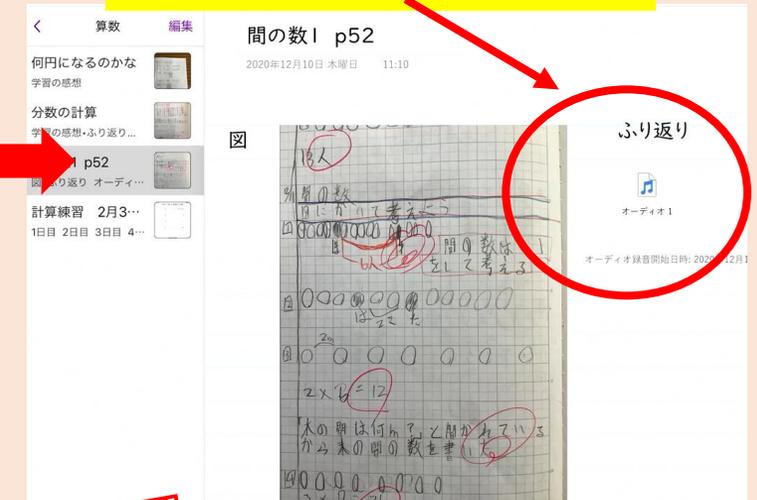
### <学習の流れ>

板書など授業の記録はノートに

ノートを写真で記録



写真とともに、振り返りや感想は音声で入力する



(動画約15秒)

図や考え方など、ノートの大切なポイントのみを写真で撮影するようになり、記録の仕方にも工夫が見られました。

## 知的好奇心の向上をめざしたデジタルポートフォリオの活用

<自閉・情緒学級 自立活動等>

作物の観察においてデジタルポートフォリオを作成し、そこから新しく気づいたことや疑問点などを書き出しました。さらに調べたいことなど新たな課題を設定することで主体的に学習に取り組む態度や知的好奇心の向上が見られました。

### ICT活用のポイント

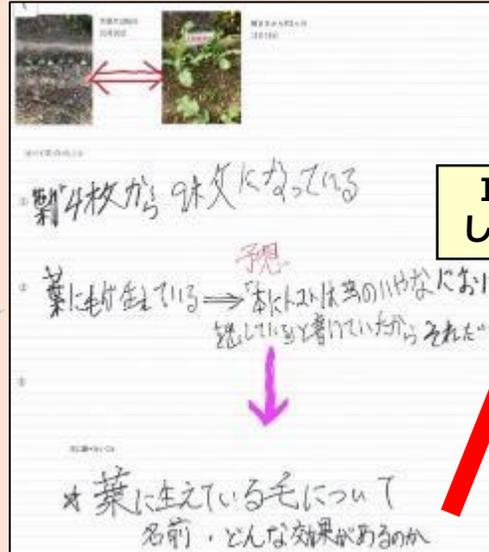
学習意欲を継続させるために、大きく写した写真にペンで書き込むなど簡単なログの取り方でポートフォリオしました。

学習の過程を写真や動画などのICTを使って記録することで、どのように学習したのかを把握しやすくなり教師が評価するときのエビデンスとしても有効に活用できます。

<OneNoteを利用したデジタルポートフォリオ>

見返す・比較することができる。  
(ポートフォリオの活用)

新しい視点の気づき



ICTを活用した調べ学習

見返したり、作物の成長の過程を比較したりする中で、新しい気づきが生まれ調べ学習につながりました。デジタルポートフォリオのふり返りのしやすさやICTによる調べ学習で、より効果的に児童の学びの意欲に合わせた学習の形をとることができました。

新しい気づきから分かったこと

大根の葉の表面に生えるうぶ毛の正体は『トライコーム』である。  
効果：害虫から葉を守る

「大根の葉を食べる虫は何だろう？」

ICTを活用した調べ学習

モンシロチョウ・キスジノハナムシ  
ダイコンシンクイ・ヨトウムシなど

新たな疑問の表出

「理科で学習したモンシロチョウはキャベツの葉も食べていた。幼虫は何を食べるのだろうか。」

理科の学習との関連

新たな課題

「モンシロチョウなど作物の葉を食べる虫について調べよう。」

・ 知的好奇心の向上  
・ 主体的に学習に取り組む態度の育成  
・ 既習の知識の定着 につながる

児童の思考・学習の流れ

## 落ち着いた学習環境で、コミュニケーションを図る

<自閉・情緒学級 自立活動等>

落ち着いた学習環境は個人によって様々です。周囲の状況や人数などで学習に集中できない児童もいます。特にコミュニケーションを図る場面では、緊張したり周りが気になったりしてうまく自分の考えや思いを伝えることができないこともあります。そこで、オンライン会議アプリ等を利用し少人数かつ落ち着いた環境を作りました。それにより素直に自己表現をすることができ、円滑な交流ができると考えられます。

### ICT活用のポイント

オンライン会議アプリ（今回はZoom）を活用しました。プロジェクタや大型テレビなどを使い、相手の表情まで鮮明に分かるようにしました。

一また、方的にならないように個人に応じた話す・聞く時のポイントをおさえて、画面越しでも相手を意識したコミュニケーションを心がけました。

緊急事態宣言前の「お話し会」の様子(自立活動)



複数のクラスの児童が1つの教室に集まり、人数も多くなるため、音や視線に敏感な児童は落ち着いて参加することが難しい時がありました。



複数のクラスが集まって話し合いをしていたが、教室をつなぐことで各クラスにしながらコミュニケーションを図ることができました。落ち着いて取り組むことのできる環境づくりに加えて、コロナウイルス対策としても有効でした。

大型ディスプレイで出力



撮影用PC (Zoomに接続)

## 学習環境を調整し、最適な環境で授業に臨む

自分の周囲の環境（視覚的な刺激、他児童の様子など）が授業の受け辛さにつながる場合があります。そこでICTを活用することで、“自分が落ち着ける環境”や“授業に集中できる環境”をつくることができます。

指導者や板書に集中することができるようになるため、学習内容の習得や意欲の向上につながります。

<第3学年 社会>

### ICT活用のポイント

自分で板書を拡大したり、視点を移動（例：黒板⇄大型テレビ）させたりできるので、学習内容へ集中させることができます。自分でどちらの教室で学ぶかを選ばせることも大切です。



 授業風景動画（約15秒）

## < 実践イメージ >



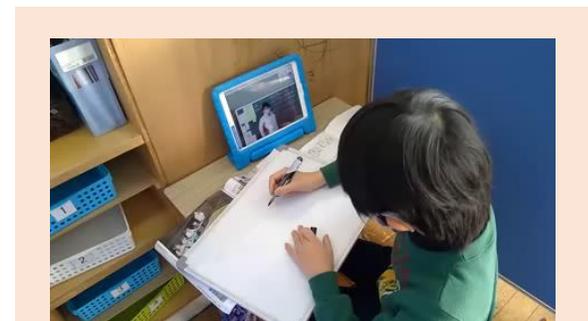
▲ 交流学級側の様子



▲ 支援学級在籍児童の交流学級での授業をタブレット端末（本実践はiPad）で撮影し、オンライン会議アプリ（本実践はGooglemeet）でリアルタイムに中継する。



▲ 支援学級在籍児童は自分の教室の自分に最適な環境で授業を受ける。  
※ 支援学級担任が個別の支援にあたる。



 ホワイトボードに考えを書いて授業に参加する動画（25秒）

## ボディイメージをつかみ、自分で自分の動きを調整する

自分の体がどのように動くのか、どうなっているのかということを客観的に捉えることが難しい場合があります。録画→鑑賞ではタイムラグが生じてしまうため、実際に動きの調整のつながりにくいです。

そこで自分や自分達の動きを大型テレビに映すことで、実際の動きを確かめながら身体操作（粗大運動）に取り組むことができます。

<自立活動>

### ICT活用のポイント

大きな画面で見せるだけでなく、画面に定規を当てる、モデルを提示するなど児童の気づきを促すことも大切になります。



 授業風景動画（約15秒）

タブレット端末の位置を工夫することで、視線が高くなり、必要な動きに近づけることができる。



▲タブレット端末（本実践ではiPad）を使って撮影する。

タブレット端末の位置が低いと視線が下がりがちになる。



▲機器の設置例（タブレット端末を画面下に置く場合）

## 相手を意識し過ぎず、他者と交流する

人と対面すると非常に緊張してしまい、言葉を発することができなったり、その状況から逃避してしまうことがあります。練習ではできていることでも、本番はできないことがあるので、成功体験を得づらいことがあります。

オンライン会議アプリ(本実践はGooglemeet)を使い、自分が安心できる場所で対面することで、緊張感を和らぐので他者と交流することができるようになります。

### <自立活動>

#### ICT活用のポイント

画面越しであっても、相手がいることを意識させることでコミュニケーションの素地を育むことにつながります。交流相手が多様であればなおよいです。



▲画面の向こうにいる相手(本実践は他校の児童)を意識しながら作品を紹介する。

### <ICT機器の設置例>



### <オンライン交流等の実践>



▲地域のプロに学ぶ出前授業



▲初対面の大人と交流



▲初対面の他校の児童と交流



▲活動の成果を発表

## 自分の成長に気づき、自己肯定感を高める

自分や自分たちが自分たち取り組んできたことを想起しにくく、自分の変化や成長を捉えることが難しいことがあります。そのため、自己肯定感が下がってしまうことが考えられます。

写真でこれまでの様子を振り返ることで、変化や成長した自分の姿を見つけることができ、自己理解や自己肯定感の向上につながります。

### <自立活動>

#### ICT活用のポイント

一斉に写真を閲覧するのではなく、共有データ(本実践はGoogledrive)を使うことで、学級として共通の話題の中で自分のことを振り返ることもできます。



▲それぞれの自席にしながら共通のデータ(写真)を閲覧している。



## 児童の実態を捉え、個別の指導や支援に活かす

支援学級に在籍する児童が学ぶ場は、在籍学級の他にも交流学級があります。支援体制によっては、在籍児童がどのように学習に取り組んでいるのかを把握することが難しい場合があります。

オンライン会議アプリ(本実践はGooglemeet)を使うことで、複数の教室にいる児童の様子を観察することができ、個別の指導につなげることができます。

### <各教科・活動>

#### ICT活用のポイント

交流学級の児童に配慮するため、タブレット端末を置く場所やマイクをオフ(ミュート)にするなどの工夫が必要になります。

複数の画面にそれぞれの児童の様子が映っている。



▲支援学級での指導にあたりながら交流学級の様子も観察する。